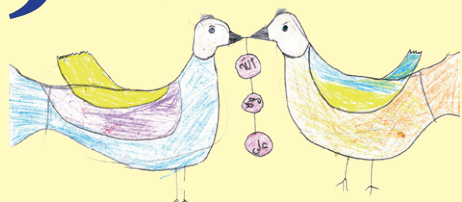


JIM-NET 便り

2023 3月号

発行：2023年2月28日



特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4丁目4番11号 内藤ビル2C
電話 03-6228-0746 メール info-jim@jim-net.net



JIM-NET
الشبكة الطبية اليابانية العراقية



目次

3年間のイラク駐在を終えて (牧野アンドレ)	P2
理不尽で巨大な暴力が席卷した後に残った希望とは (鎌仲ひとみ)	P4
イラク戦争から20年 つぎは中国と戦争をするのか (谷山博史)	P5
アルビルとバスラから	P6
JUSTPEACE! ～イラク戦争開戦から20年・写真と絵画で辿る過去と現在、そして…。	P7
それでも希望をつなぐ (崔 麻里)	P8

3年間のイラク駐在を終えて

前イラク駐在員 牧野アンドレ



いつも JIM-NET をご支援いただいている皆さま、前イラク駐在員の牧野アンドレです。昨年 10 月末で JIM-NET イラク駐在員の職を終え、11 月に帰任となりました。2019 年 10 月に入職し 11 月にアルビルに赴任し、そこから 3 年間は、アルビルのローカルスタッフたちと試行錯誤しながら駆け抜けた日々は、あっという間に過ぎていきました。

意気揚々とアルビルでの生活を始めた赴任直後の 2020 年初め、米軍による空爆でイランのソレイマニ司令官が殺害され、イラク国内の緊張が高まると、まさかの緊急退避になりました。そこから新型コロナウイルスの流行が始まり数ヶ月間アルビルに戻ることができず、知り合ったばかりの現地スタッフたちとは遠隔での仕事初めとなりました。当初は皆が初めての事態にどうすればいいのかわからず、まずはがんを患う子どもたちの命を守ることを最優先に、現地の省庁に掛け合い、様々な手段を使って医薬品を届けるためスタッフたちが奔走してくれました。

混乱の幕開けを経て、イラクに戻ることができた 2020 年の夏、突き刺さるような熱気の洗礼を受けながら、やっと本格的な業務に取り掛かることができるようになりました。コロナへの対応と並行して小児がん支援と難民支援のプロジェクトを進め、そして団体としても新体制になったことから、アルビル事務所の就業規則や会計規則、ス



タッフたちの能力強化と様々なことを一気に取り組む多忙な日々が始まりました。私自身もこの仕事初めての駐在員職で、現地スタッフたちも 20-30 代という年齢の中で、「とにかく試してみる」をモットーに各方面の仕事にあたりました。

院内学級では子どもたちを習熟度別に分け、クルド自治区のカリキュラムに沿った授業プランを立てて指導にあたり、治療後に学校に戻れていなかった 8 人の子どもたちの復学を支援することができました。難民支援事業では、妊産婦や貧困層に属する難民キャンプの女性たちによるアクセサリー作りに取り組みました。作品作りの間に女性たちの会話も弾み、完成品を東京のイベント会場でテスト販売したところ、好評を得ることができました。新しいアイテムも増える予定です。また新たに地元の NGO とパートナーとなり、隣のドホーク県における国内避難民の女性たちの支援を始めています。

駐在中、プロジェクトが進む確かな手応えとともに何度も挫折を経験しました。その最たるものが、支援をしていた子どもたちの死でした。治療を頑張りながらも、院内学級で一生懸命勉強していた何人もの子どもたち。前週までは元気だったのに、週明けに出勤すると「週末に容体が急変し亡くなってしまった」という知らせをスタッフから聞くことも一度や二度ではありませんでした。JIM-NET ハウス内に響いていたその子の元気な声がまだ残っ



ているようで、しばらく JIM-NET ハウス内の手すりに手をつき茫然としてしまいました。弔問のための家庭訪問が、私の駐在員としての仕事の中で、一番苦しい時間でした。「この子の命を守るために、もっと何かできることはなかったのか」と自問し続けました。ムハンマド、エハラス、アフマド、ダーリーン。この文章を書きながらも、神様のもとへと行ってしまった子どもたちの顔が今でもまざまざと蘇ってきます。

しかし深い悲しみの中にあって、最も子どもたちと近かった現地スタッフたちはすぐに気持ちを切り替え、今、目の前にいる子どもたちを守ることへと意識を向けていました。そんな彼らの支援者としてのプロフェッショナリズムをいつも尊敬し、彼らの姿を見て、私もまた前を向く強さを取り戻すことができました。

私のアルビルでの3年間の終わりに近づいてきた昨年の秋、「結局、私は何を変えることができたのか」と考える時期がありました。イラクを巡る情勢はとてよくなっているとは言えず、自分のやってきたことは焼け石に水だったのではと。しかし今まで支援をしてきた人たち、現地のパートナー団体、そして一番近くにいた現地スタッフたちとお別れをする中で、「あなたのおかげで〇〇が変わった、ありがとう」と言葉をかけてもらい、最後に私が関わってきたことへの意味を改めて再確認することができました。



「一歩ずつだがイラクは良い方向へと向かっている」と信じて、胸を張って帰国することができました。

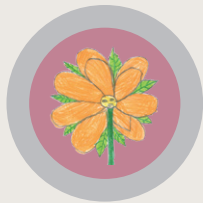
荒涼とした大地に緑の絨毯が敷かれる春の壮大なクルディスタンの大地、50℃にも迫る夏場の熱気、半年溜まった砂塵を洗い流す秋の初雨の匂い、毎朝早く爆音で流される礼拝の呼びかけ、JIM-NET ハウスで響く子どもたちの声、ちょっとスパイスの効きすぎた事務所でのお昼ご飯の味、そして本当のホスピタリティとは何かを教えてくれた現地の人たち。

振り返れば、これらイラクでの経験の全てが愛おしく、離れがたく、思い出せば心に温かいものが流れ込んできます。この JIM-NET のイラク駐在員としての経験は間違いなく、人道支援者として駆け出しの自分の将来の土台になりました。

この3年間、日々の業務をこなしていく中で、支援者である日本の皆さまの存在の大きさをを感じる毎日でした。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。この3年という時間を通して、アルビル事務所の業務の土台を作り、次の駐在員へのバトンを繋げることができたならば幸いです。今度は現場で働く身から JIM-NET を応援する立場に変わり、今後もイラクでの事業を見守り続けたいと思います。

最後になりますが、いつかイラクが戦乱とは無縁の国となり、日本の人たちが当たり前のように旅行で訪れることができる国になってほしいという願いと共にこの文章を締めさせていただきます。遠くない将来、日本とイラクの人々が当たり前のように交流のできる未来がくることを願っております。

3年間、ありがとうございました。



理不尽で巨大な暴力が席卷した 後に残った希望とは



JIM-NET 理事 鎌仲ひとみ



2002 年秋、私は 2 回目の撮影をするためにイラクに入りました。1 回目は 1998 年 11 月でしたから、それから 4 年後、そしてイラク戦争開戦の半年前でした。

当時製作していた「ヒバクチャー世界の終わりに」を完成させるためには、どうしてもイラクの白血病の子どもに会い、医療の現状や生活を撮りたいと考えたのです。

2002 年のその頃は、米軍がアフガニスタンへの空爆を開始した頃で、世界は不穏な雰囲気満ちていました。イラクへの渡航も厳しく制限されていました。

1998 年当時私は NHK の番組で出かけていたので、イラク政府から許可を取り付けるのもなかなかだったのですが、2002 年は世界中からメディアが殺到しており、すでに自主制作に切り替えていた私の撮影チームはどんどん許可が後回しにされていきました。

いつ戦争が始まってもおかしくない、アフガニスタンへの空爆の矛先がやがてイラクに向かうだろうという予測がされていた時期です。なんの後ろ盾もない私の撮影許可は、困難を極めました。それでもなんとかかんとか許可を取り付けたのですが、今思えば、すでにサダム・フセイン政権は崩壊寸前だったのだと思います。情報省の役人たちはとにかく、海外からやってくるメディアをカモにして、外貨を稼ぐことに汲々としており、私も法外な袖の下を要求されたりしました。

撮影許可の第二弾はバスラへ行くことでした。情報省のスタッフが一人同行しなければならないのですが、私のチームは貧乏だという噂が広まって、誰しもが大きくて裕福なテレビチームに付きたがり、私と一緒にバスラに同行するスタッフ

と通訳が見つからないという事態に。しかも私の周りには、アメリカやイラクの訳のわからない輩（諜報部員）がうろうろする始末でした。数多の困難を右往左往しながら切り抜け、バスラへの撮影許可を取得したのは、イラクの滞在期限があと二週というところでした。

バスラへ

イラクへ発つ前、私の中に繰り返し現れる一つのイメージがありました。それは、バスラの砂漠の中を歩いている少年の姿です。そして病院の中にも、その同じ少年がいる。私はこの少年に会うことができるという確信を持って、バスラに行くことを決めたのですが、それはまるで砂漠の砂の中から何かを探し出すような行為だと、スタッフには思われたようです。何しろ、私の直感でしかなかったのですから。

そして日本からカメラを持って、バスラに行くことの途方もない困難さ。私の根拠のない直感に、プロデューサーは予算をつけてくれ、スタッフはついて来てくれました。

そして、時間がないという焦りの中、バスラの小児がん病棟に父親に連れられたムスタファが現れたのは、バスラに着いて 3 日目でした。当時、ムスタファは 9 歳。双子の兄は元気なのに、彼だけが家族の中で、唯一白血病になっていました。劣化ウラン弾が使われた地域で暮らす家族を撮影するにも、軍の許可、イラク政府の総務省の許可などハードルが横たわっていました。しかし、奇跡的になんとかムスタファと家族、そして治療風景を撮ることができました。「ヒバクチャー世界の終わりに」で、ぜひ観ていただきたいです。そして、

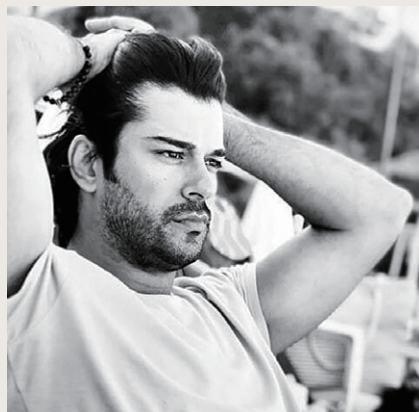
半年後イラク戦争が始まりました。

その後ムスタファは、白血病を乗り越え、成人し、今はカメラを学んでいるそうです。イラクのがんや白血病の子どもたちが生き延びてくれることが、私たちの希望です。

※『ヒバクチャー世界の終わりに』は、ぶんぶんフィルムズのオンラインムービーにて配信中です。
(72 時間レンタル 1,004 円)



『ヒバクチャー世界の終わりに』に登場する
ムスタファ・9 歳 (右) 2002 年



20 年後のムスタファ・白血病を乗り越えて



イラク戦争から20年 つぎは中国と戦争をするのか



JIM-NET 顧問 谷山博史

2003年2月4日、パウエル国務長官は、翌日の国連安保理での演説のリハーサルを行っていました。その時、CIA 欧州部長からリハーサルに同席していたテネット CIA 長官に電話がありました。イラクの大量破壊兵器製造の証拠とされるイラク人技師「カーブボール」の証言が、虚偽だとの連絡でしたが、パウエル長官には伝えられませんでした。嘘の証言に基づいた国際法違反の戦争が、決定的になった瞬間でした。

昨年12月16日、日本政府は敵基地攻撃を容認し、5年以内に防衛費を現在の2倍にする安全保障関連3文書を閣議決定しました。2015年の安否法制とこの安保3文書によって、日本はアメリカの戦争での後方支援あるいは盾の役割から矛の役割に転換することになったのです。1991年の湾岸戦争でアメリカから戦場で「ショー・ザ・フラッグ」を強要され、アフガニスタン戦争とイラク戦争で「ブーツ・オン・ザ・グラウンド」すなわち派兵を強要された日本は、いよいよ前線で戦うことを余儀なくされます。ときあたかも、アメリカを発信源とする「台湾有事」の危機が叫ばれる中、日本はイラク戦争とアフガニスタン戦争の失敗で、対テロ戦争から対中国の戦争政策に転換したアメリカの駒として使われることを意味します。

イラク戦争の教訓を国際的にも日本においても生かすことができなかったことが、今の状況につながっています。JIM-NETは2004年の発足以来、白血病の子どもたちへの医療支援、治療を受ける子どもたちへの経済支援、教育支

援やメンタルケアを中心に活動を展開してきました。それはイラク戦争の被害を軽減するための活動であるとともに、イラク戦争の不条理を社会に訴える活動でもあったのです。劣化ウラン弾による放射線障害である白血病治療の取り組みは、福島での原発事故の被害者への支援にも繋がりました。イラク戦争の教訓を日本の政治に生かすために、他団体と協力してイラク戦争の検証を求めるネットワークも立ち上げました。同じく他団体と協力して、イラク戦争から10年の2013年には「イラクテン」という大きなイベントも開催しました。そして今年、イラク戦争から20年。ウクライナ戦争が継続する中、今度は東アジアでの戦争が、準備される歴史の大きな転換点に私たちは立っています。イラク戦争を振り返ることは、私たちひとりひとりが直面する戦争の危機をいかに乗り越えるかを問うことでもあるのです



砂漠に残された劣化ウラン弾



白血病の少女と母親 ©森住卓



アルビルと
バスラから



JUSTPEACE!

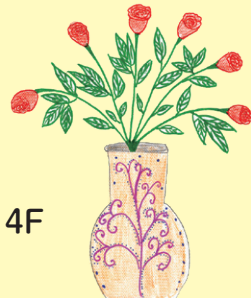
イラク戦争開戦から20年・ 写真と絵画で迎える過去と現在、そして…。

会期：2023年3月16日(木)～3月21日(火)

時間：11時～18時30分

但し、3月19日(日)、20日(月)、21日(火)は16時まで。

会場：神保町・文房堂ギャラリー 東京都千代田区神田神保町1-21-1 4F



イラク戦争開戦から20年。節目の年を迎えるにあたり、写真と絵画の企画展を開催いたします。イラク現地の様子はもちろん、活動を通して出会うイラクとシリアの子どもたちとその家族の現状や笑顔をお伝えしようと年一回の展示を企画していますが、今回は「イラク戦争」を振り返る大切な企画展。現在はもちろん、20年前のイラクの様子を目にすることはほとんどなく、「イラク戦争」と耳にしても想像することが難しいかと思います。

今回は、神保町の老舗・文房堂の広い空間に恵まれたギャラリーでイラク戦争前後の様子に触れて頂けるよう、企画と準備に取り組んでおります。

1998年以後、イラクの子どもたちの取材を続けられたフォトジャーナリスト・森住卓さんと2013年以後、イラクとシリアを取材されているドキュメンタリー写真家・鈴木雄介さんの作品、そしてJIM-NETの活動の様子、小児が

んの子どもの絵画をご覧ください。

ファッションデザイナー・tenboさんによりデザインされたアートパレット「EDEN」は、歴代のチョコ缶の柄が散りばめられ、SUGIZOさんが自身の生誕半世紀祭でEDENの衣装を着用されました。その後、EDENを転写したギターが考案され、構想から2年ほどの時間を要して完成し、現在多くのライブで使用されています。今回はこれらの衣装とギターを皆さまに間近で見ただけのよう準備中です。

期間中には会場で様々なミニイベントも開催します。海外事業スタッフも帰国し、スタッフ一同で皆さまのご来場をお待ちしております。

3月19日(日)と20日(月)には、無観客オンライン配信でトークイベントを開催いたします。是非是非、事前申し込みの上、ご参加ください!

★スペシャルオンライン配信企画★

♪3月19日(日) 19:00～21:00 (参加費無料)
「JUSTPEACE! ～イラク戦争から20年。
過去と現在、そして…」

登壇者：加藤登紀子(歌手)、湯川れい子(音楽評論家)、
酒井啓子(千葉大学教授)、斉藤とも子(俳優)、
鎌田寛(JIM-NET代表)

♪3月20日(月) 19:00～20:30 (参加費無料)
「EDEN TALK」

登壇者：SUGIZO(ギタリスト、アーティスト)、tenbo(デザイナー)、
斉藤亮平(JIM-NET海外事業担当)

♪詳細は同封のちらしをご覧ください。



お申し込みは
こちらから➡



または
メール: info-jim@jim-net.net
電話:
03-6228-0746



それでも希望をつなぐ

JIM-NET 事務局 崔 麻里

3月20日でイラク戦争開戦から20年を迎えます。戦争がもたらしたインフラ破壊、人々の精神的な傷や宗派間の紛争による混乱と弊害は未だに続いており、現地の人々からは「疲れた」「私たちのことを忘れないで」、特に若い世代からは「生まれた時から何も変わらない」と苛立ちと諦めの声が聞かれます。

2004年、私の息子はまだ小学生でした。新聞記事で急増したイラクの小児がんと白血病に苦しむ子どもたちを支援するJIM-NET発足前のJVC（日本国際ボランティアセンター）の活動を知り、すぐに連絡を取りました。小さな子どもを持つ親として居ても立っても居られず、「何かできないか」と相談し、地元でイラクの子どもたちの絵画展とミニトークを開催する運びとなりました。小学生、中学生を含む来場者の方々が展示された子どもたちの写真と絵に熱心に見入る後ろ姿が忘れられません。

あれから20年。世界からいまだに戦争や紛争が絶えないなか、昨年1月24日、ウクライナへのロシア軍侵攻が始まりました。終戦の願いもむなしく、現地では先が見えない状況が続いています。ロシア軍侵攻の報道を受け、代表の鎌田からウクライナからポーランドへ逃れる人々が増えることが予想されること、厳冬のなかを避難する子どもたちが心配だと連絡があったことがつい昨日のことのようです。その直後、JIM-NETの姉妹団体・JCF（日本チェルノブイリ連帯基金）は、チェルノブイリ原発事故被災者への医療支援活動で培った繋がりを活かし、ポーランドへの避難した人々への支援を決定、スタートしました。

JIM-NET理事会では、JCFのウクライナ支援活動について急遽話し合われました。ウクライナ侵攻が始まっ

て3カ月に満たない時期でしたが、JCFのカウンターパートを通じ、緊急に必要とされるものの調達と手配が可能であることに「JIM-NETも何かできる!」とJCFへの支援の思いが一致。ちょうどその頃、鎌田からJCFとJIM-NETへの生前贈与を受けており、その贈与金の一部をJCFのウクライナ支援に寄附することを決定しました。事務局では、JIM-NETの支援者さま向けのチラシと振込用紙の作成と印刷、SNSでの呼びかけ、心当たり

ある方々へのお願いに取り組んだところ、すぐに多くの方々から温かなお気持ちが寄せられました。この間、JIM-NETが発足した当時から続く皆様の平和への強い思いに胸が熱くなりました。

先月で無事に14万個達成ができたチョコ募金。向日葵の絵を描いたホズガは、ユース肉腫の治療を続けていましたが、昨年11月15日に急逝しました。享年9歳でした。

7年前に美しいポインセチアの絵を描いたヤジディ教徒の娘、ナブラス（享年14歳）も同じ病気で天国へ旅立っています。ホズガもナブラスも抗がん剤治療の影響で髪の毛が抜け落ちた姿で最期を迎えました。

向日葵のチョコ缶には、背景に鮮やかな青色をアレンジしたこともあり、ウクライナのことにも思いを馳せる特別な缶となりました。「ホズガ」とは、クルド語で「希望」を意味します。昨年末、JCFはチョコ募金に協力してくれ、300個のチョコ缶が日本を旅立ちました。ポーランドの配給先に並ぶウクライナのお母さんと子どもたちの手に渡されたチョコ缶たち。ボズガから託された「希望」を小さくてもいい、たくさんつなげていこう! そんなことを考えながら、3月20日を迎えようとしています。



ホズガ



ナブラス



JIM-NET
الشبكة الطبية اليابانية العراقية

特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)

郵便振替口座 00540-2-94945 加入者名 日本イラク医療ネット
Facebook、Twitter、Instagramもぜひご覧ください。『JIM-NETで検索』

募金・サポーター会費はこちらへ→

